

古代エジプトをたずねて

横須賀市 野村 良彦

傘寿を迎えた記念に古代エジプトの遺跡をめぐるツアーに夫婦で参加した。折しも不穏な中東情勢の中、カイロまでの直行便であったことが幸いしてツアーは成立した。カイロ空港からは、国内便でルクソールまで行き、そこから遺跡巡りが始まった。

5月2日の午前中は、ラムセスⅡ世が建造したカルナック神殿とルクソール神殿を見学し、ナイル川クルーズ船にチェックインし

た。午後のデンデラ・ハトホル神殿の見学では、美女子クレオパトラ七世のレリーフを見る事が出来た。午前午後共に巨大遺跡群に圧倒された。唯一残されていたツタンカーメンのミイラを目の当たりにした時には、興奮した。クルーズ船はエドフに寄港して、ホル

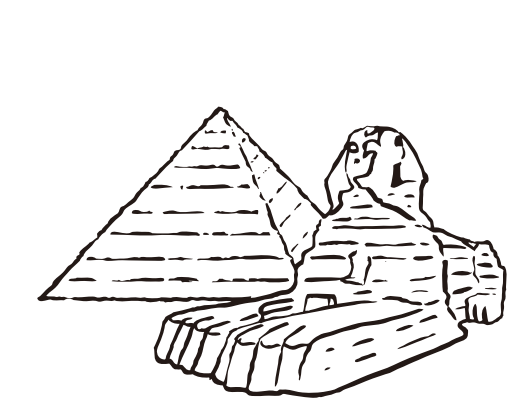
番小さい王墓がツタンカーメンの墓であり、目立たなかったから、盗掘をまぬがれたらしく、唯一残されていたツタンカーメンのミイラを目の当たりにした時には、興奮した。クルーズ船はエドフに寄港して、ホル

ム・オンボ神殿を見学し、当時は多神教であったという説明に納得できた。ハヤブサやワニやジャッカルも神であり、ファラオも神になっていた。アスワンからアシンペル神殿へは、バスで約280kmを移動したが、途中の砂漠はアスワン・ハイ・ダムから灌漑用水で緑化が進んで来ている事に驚いた。アシンペル大神殿にはラムセスⅡ世の巨大な石像4

体が圧倒的な記憶となった。最終日には、最後のハイライトであるピラミッド群とスフィンクス、更には大エジプト博物館でツタンカーメンの王墓に埋蔵されていた、五千点以上の秘宝の数々を目の当たりにしたが、とても5時間で見きれない量ではなかった。旅を終えて、エジプトにはこの年齢になっても、もう一度行ってみたいと思ってしまう。

人生の終焉について

横須賀市 中島 茂



私は現在78歳であるが、3回の救急車を経験している。さすがに救急搬送されたときには覚悟を決めたものであった。私はそれ以来終活を開始している。まずは、不要な衣類やバッグ、本の断捨離から始めている。そして死生観についての本を読むことが多くなった。特に二人は同年齢・同じ誕生日の石原慎太郎と五木寛之が好きで、石原氏と五木氏は生まれが全く逆の

環境であり、石原慎太郎は、一橋大学出身のお坊ちゃんであり、二人とも仏教が好きでも、考え方が正反対であることに私はともに共感する部分を持っています。私自身は二人の中間のような人間ですが、社会貢献を目指すという同じ理由で、と正反対でこの原因として、五木氏は、北朝鮮平壤で終戦を迎え、本心に死ねる思いで日本に帰国する間に、人間の本质を見て人間業の深さを身にしみ、他

「力」の道を選び、お互い社会に大きく貢献しながらも、考え方が正反対であることに私はともに共感する部分を持っています。私自身は二人の中間のような人間ですが、社会貢献を目指すという同じ理由で、と正反対でこの原因として、五木氏は、北朝鮮平壤で終戦を迎え、本心に死ねる思いで日本に帰国する間に、人間の本质を見て人間業の深さを身にしみ、他

人間はどうにも出来ない罪深さをもっているにも関わらず、石原氏は政治家として、小説家として死ぬまで活躍してしまっただけに、今現在も死について語りながら生きています。大河の一滴の最終章を書きあげていました。

革命家の祈り Ⅲ — 起源という物語

藤沢市 岡本 俊一

18世紀フランスの占術家 Jean-Baptiste Alliette (エッティラ)。前回・前々回の「革命家の祈りⅠ・Ⅱ」でも触れた、独自のカード体系と占術理論を構築し、後世に影響を残した人物である。

占いの起源は、しばしば神秘的に語られる。しかし、エッティラの著作を検討すると、その技法を「誰から学んだのか」を示す一次史料は、現在確認できる範囲では見当たらない。

これに対し、後代研究では、彼の体系は北イタリア、とくにピエモンテ周辺のカード文化の影響下で成立したとする見解が有力である。興味深いのは、「Piemontese (ピエモンテ風・ピエモンテ地方の)」という地域・文化的表現が、後世には「ピエモンテ人から学んだ」という人物伝承へ転化していく点である。

しかし、その「謎のピエモンテ人」の存在を裏付ける同時代史料は確認されていない。つまり本来は文化的・地理的影響を示す言葉が、時代を経る中で、あたかも実在の「秘伝の師」のように再構成された可能性がある。

当時のヨーロッパでは、「エジプト熱」ともいえる古代エジプト文明への憧憬が広がっていた。しかし実際には、カード文化そのものは北イタリアを中心とするヨーロッパ世界の中で発展したものである。神秘的起源の物語もまた、その時代の知的文化の中から生み出されたのである。

そして現代においても、人はなお「秘められた起源」を求め続けている。占いに限らず、医学や宗教、思想の歴史においても、“誰が始めたのか”という物語は、しばしば実像以上の力を持つのである。



ダックスフントの鏡

〜透明化鏡の向こう側〜

綾瀬市 佐々木 淳一



ダックスフントは鏡を見ると「人」ではなく生(なま)の犬が映っていると怒る。理想を投影した自分と生(なま)の自分とのズレが苦悩の原点であり、成長の源でもある。

オキシトシンのグルーブ愛は排他性の始まりでもある。哺乳類の投影は哺乳類以外には難しくなりがち。投影の限界領域が排他性の境界線ならば、限界突破は鏡の透明化による向こう側への変容する感動を呼び起こす。

自己存在が刻々変遷し続てく。BUMP OF CHICKENのプロジェクトの契機は自作の歌が聴く人の心に自分事を語っていると感じられる喜びをシェアできると気づけた。ナシヤル氏

ける統計的量子雲の集合体だとして、生きる横断面写真の生(なま)の自分を愛しみつ、縦断する時計的時間軸の方向性を本質的理想の潮流波動に同期させていくことが生き抜く向上性の目標になり得る。或いは相手の歌や踊りを触媒的媒体として、全ての自己量子が同期して透明化した時本質的理想の自己像になり得るのかもしれない。天国のダックスフントの

俳句

大和市 三平 将彦

夏惜しむこともなくなる五十路かな

あんた誰おまえこそ誰盆踊り

夏痩せの老医いよいよ透けて見え

